
Life to Door

メビウスの回廊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L i f e t o D o o r

【Nコード】

N 1 4 1 7 V

【作者名】

メビウスの回廊

【あらすじ】

世界の頂点に立った生物「恐竜」が滅び、「人間」もまた、滅びを迎え始めていた。

新たに生態系の頂に立とうとする生物は「人間」から危険視され、生物は、その生態の複雑さより「異獣」と呼ばれるようになる。

生存本能より戦い続けた両者だが、敗北の兆しは「人間」に訪れた。

そうして、時代の概念が一度無へと還った頃。

国ではなく、都市単位でのみ住むことを許され、さらなる進化を遂げた「人間」。何の意図もなく、ただの偶然とはいえ事実上地球を支配した「異獣」。

激動と対照的な意味での平穏が訪れたその世界に再び暗雲が忍び寄る。

大きな対抗手段である魔法を扱うようになった「人間」と、かつて見られなかった「異獣」の戦闘。

そしてその先にある、真実を求めて。

プロローグ 開戦の証

都市の外には死が振りまかれている。風に乗せられたそれに鼻をくすぐられるような感覚がするのが戦前だ。においはないが、それは肌でも味わえるほど、自分の気分を高めてくれる。

可愛く言えば、くすぐられるような感覚があった。

「そんなことはないと思いますけど」

感慨にふけるクレイネル・エルヴァーユの何気ない呟きを無下にも切り捨てたのは、彼より十歳ほど年下の少年だ。

アーシュ・トラウイスティア。十二の齢で「最高級の戦場」に立つことを許された天才魔術師。

クレイネルに言わせれば低レベルな戦場はさらに幼いときに経験し、「最高級の戦場」に立てる証明の武器を王より譲渡され、一年ほどになった。

子供特有のあどけない顔にはいくらかの傷が見受けられ、幼い瞳は暗い青で占められている。

今日が彼の初めての「最高級の戦場」となるはずだ。

クレイネル自身も「最高級の戦場」と呼ばれる戦いには一度も参加していない。そういう意味では、高揚感はいつも以上だ。

「ベラリスさんはどう思います？」

その隣にいる、幼少のアーシュとほぼ変わらない背丈の女性。外見年齢だけで言えば、アーシュとそれほど変わらないように見える女性にアーシュは語りかけた。

ベラリス・マルスクイル。本来の年齢に見合わない体型をした彼女はあどけない微笑を都市外に向ける。

「これといって感じたことはないわねえ。それより、クレイ。軽口を叩く余裕があるなんて、頼もしいわね？」

「いえ、僕としても、ベラリスさんとモトランさんが出陣すると聞いた時点で安堵したわけですよ」

言いながら、クレイネルらよりも数歩後ろで煙草をプカプカとふかす男に目を向ける。

モトラン・ミスチャ。髪の毛が一つの塊として頭についていて、仏頂を顔に貼り付け、背の高さと胴回りが合わない服を身につけた壮年。

「残念はないのか？」

モトランがクレイネルを見ないままに訊いた。

「ないと言えば嘘になりますが、守護者四人での共同戦線とは僕の記憶にはありませんからね。そちらのほうが、今は楽しみになっています」

自分だけで戦いたかった。そういう願望を沈めて、クレイネルは苦笑する。

モトランが仏頂面で固めているのだとすれば、クレイネルは笑顔で固めていた。わざとらしい笑い声を漏らし、モトランに鼻で笑われる。

「それにしても……本当にここが戦場なんですか？」

四人が立っているのは、都市の縁だ。

通常、戦闘を行う場合は都市への被害を最小限に抑えられる都市外で行う。だが、四人は都市の縁に立っていた。

「ここでもいいのよ。王命だもの」

「それはまた随分適当な命令ですね。僕たちに都市を守る戦いをせよとお命じにされましたか」

都市外で戦えば、たとえば放物線を描くような遠距離攻撃を都市に仕掛けられた場合、防ぐことができない。

クレイネルは形の良い笑顔をわずかにしかめながら訊いてみた。

「『できないとは言わせないからね』って凄い笑顔だね」

「はた迷惑な」

苦笑しあうクレイネルとベラリスを尻目に嘆息するモトラン。

「最高級の戦場」を任される魔術師達。彼らは個人が強すぎるために群れる行為を好まない。日常的に会話する場などほとんどないが、

そのめつたに見られない光景が「最高級の戦場」を前に展開されている。

一般人から見れば異常者の集まりだ。

しかし、異常者から見てもこれは異常なのだろう。クレイネルはそう推測する。

かつて、四人に出撃命令が出たことがあるだろうか。時代を遡ればあるのかもしれないが、話に聞いたことはない。

「でも実際、戦闘になったらどうするんです？ 配置は決めなくていいんですか？」

アーシュの暗い目はベラリスに向けられていた。

「そうねえ。じゃ、基本はアーシュくんとクレイに任せて、私が最終防衛ライン。モトランは援護射撃でいいわよね？」

疑問はモトランに向けられる。

少女の容姿をまとったベラリスと中年特有の雰囲気をもったモトラン。二人の放つ存在感こそ違うものの、年齢と発言力では大差ない。

「断ると言っても無駄なのだろう？」

「わかっているならよし」

満足そうにうなづくベラリスは、懷から小さな裁縫箱を取り出した。それを手のひらに乗せる。

「十三糸^{じゅうさんご}」

それが裁縫箱の名だ。

呼ばれて返事するがごとく、十三糸は形を変える。箱は元の形を捨て、手袋に変化した。手袋の指先には極細の糸が繋がっており、さらにその先端には針がついている。

魔術師達は自らの武器をそのまま持ち歩かないことが多い。自分の好きな形にとどめ、必要なときに武器として召喚する。

続けて、クレイネルも自身の武器の名を呼んだ。

「四足手甲^{よそくしゅこう}」

取り出された四枚の板が手を覆い、足を覆った。手足そのものを

武器にするクライネルの補助を行うために存在する武器。それが彼の持つ四足手甲だ。

モトランも同様に、二つのキーホルダーを取り出す。拳銃のキーホルダーだ。

名前を呼ばずして、二本の大筒を召喚する。誰かが「二丁大砲にちやうたいほう」と名づけたが、モトランはそれを気に入らず、頑なに声を出すことなく召喚している。そういう習慣だ。

「……あ、八剣やっぺん」

最後に、少しあわてながらアーシュが一本の金属棒を取り出し、一本の剣を召喚した。剣身は白く輝き、映った彼の暗い表情さえ明るく見えるほどだ。

「しかしまあ、いまさらながらですが、これほど警戒する必要があるのですかね」

「……戦つてみればわかる」

「都市に損害を与えないように、ということなら必要なんじゃないですか？」

「戦つてみなきゃわからないわ。来るわよ」

声の調子を変えずに、ベラリスは告げた。

ベラリスの言葉は始まりの合図となり、途端に地面が上下した。

「地震……？ 失礼、違いますね。お出ましということですか」

瞬間、全員の視界が褐色に覆われた。地面から這い出たそれは太陽の光をさえぎり、都市には影が落ちる。

「大きさは結構なものがあるわね。大型の天獣てんじゅう……それ以上かしら」

巨大なムカデのような生物が体を持ち上げていた。足元は地面に連結し、体表面は泥に包まれている。

「地獣ちじゅうではないんですか？」

訊いたのはアーシュだ。

「似て非なるものだ。地獣でなければ天獣でもない。もちろん海獣かいじゅうでもない。そういう相手だ」

「へえ」

重く響くようなモトランの声にクレイネルは感嘆の声を上げた。

アーシュのほうを見ると、彼もまた大きさに見とれている。深く沈んだ目は生物の大きさを測っているように見える。

「さて、どう片付けたものやら」

「とにかく、終わらせましょう」

「……まあ、そうなるよね。どうも君は禁欲だなあ」

クレイネルとアーシュがうなずきあう。と同時に、二人は風となった。

示し合わせたわけでもなく、二人は左右に跳躍する。

「どこからどこまでが首かはわかりませんが、おとなしく胴体と離れてもらいましょう」

クレイネルが言いながら体の向きを変える。

放出系魔術、延手刀。えんしゅとう

合わせて、アーシュが剣を振り下ろした。

放出系魔術、滝降し。たきおろ

クレイネルの手刀が生物に食い込み、そのまま斜め下に振り下ろされる。振り切った手刀の延長線上にあった生物の体が、薄い紙を破るように裂かれた。

同時に、アーシュは滑り降りるかのごとく生物の体をなぞって移動する。

二人の技は見えている生物の半分あたりをX字型に斬り裂いた。

(……………?)

不信感を覚える。「最高級の戦場」に現れる敵がこれほどあつけなくて良いのだろうか。これでもし終わるのならば、四人も必要ないどころか、自分たちである必要はない。

「爆ぜろ」

崩れ落ちた上体は地に横たわっている。生えた下体を殲滅すべく、モトランは二丁の大砲から球を打ち出した。

何の仕掛けもない火薬球が直撃し、爆発を起こす。

「もう！ 誰が掃除すると思っているのよ！」

都市側に飛散した肉片は全てベラリスの操る針と糸に裂かれ、勢いを失う。足元に落ちた肉片を気味悪そうに見ながらも、針と糸を動かす作業には余分がない。

生物が生えていた穴が現れていた。そこでは爆発の届かなかった生物の片割れがうねうねと動いている。

しかし、四人はその様子を観察していない。

全員の目は散らばったはずの肉片に向かっていった。

「……………溶けた？」

アーシュが呟く。

的を射た表現だ。クレイネルとアーシュが斬り裂いた上体も、ベラリスが処理した肉片も今はもう見られない。

土と化したのだ。

緑色の地は泥水になり、肉片は泥の塊となる。ベラリスとしては掃除の必要性がないことを喜ぶべきかもしれない事態だ。

さらに変化は訪れる。

大きな音ではないが、メキメキと音がした。穴の中から何かが見えてくる。

それは、先ほど四人が目にしていたものと同じものだ。

「なるほど。土を使つての超再生。体から離れば元の土となり、また再生の原料となる。おおよそこなところでしよう」

「すると、何かしら。半永久的に生き続けるわけ？」

「餓死ということがなければ、そういうことになりますね」

伸び続けた生物は、やがて元の大きさに戻り、都市に向かってさらに伸び続けた。

アーシュの立ち居地からは見えていた。やはり、この生物は地面に同化している。

「ふむ。確かに、地獣ではないですね」

地獣の生態は決まっている。このような特異変化を起こしているものは地獣と呼ばれない。

「とはいえ、天獣とも言いがたい。地面から出てきましたし」

「種類など問題ではない。馬鹿共、離れろ」

クレイネルとアーシュが刹那で跳躍する。モトランの持つ二つの大砲はすでに技の準備ができていた。

放出系魔術、魔弾。

本来火薬がつまってるはずの砲身に、彼の魔力が集まる。光球となった彼の魔力は勢いよく飛び出し、生物の頭部を粉碎する。

しかし、モトランの技はこれだけにとどまらない。

内包系放出系複合魔術、連弾。

魔弾は連射された。光球は次々と生物の部位を破壊していく。

「私の仕事は変わらないのよッ！」

いくら土に戻るとはいえ、都市が土まみれになれば掃除しなければならぬ。当然飛散した肉片は系にぶつかり、勢いをそがれる。

都市の建物までは届かない。

爆発はやはり地の下には届かず、再生が始まる。クレイネルはため息を吐きながらその様を見守っていた。

（なるほど。確かに高級かもしれないね）

今のところは終わりが見えない戦いだ。地上にいる土塊をいくら壊そうと、無限に再生してくるだろう。

とすれば、限りなき敵に限りある自分の技を全て出すことができ。あるいは、自分の全力を出せるかもしれない。

（もつとも、残りの三人がどうするかはわからないけど）

しかし、それも楽しくて仕方がない。

今はそれでいいのだ。

高揚が顔に溢れる。それさえ気にせず、クレイネルは戦場に躍り出た。

都市の外面側になれば、都市の外と内の環境の違いがよく伝わってくる。都市の縁に張られた、都市全体を覆うドーム型の膜を通り

抜ける複数の運搬船の機械音が重なりあい、強い風の音もかき消さ
んとしていた。

「いやあ、とりあえず無事に着いてよかったねえ」

本来聞かせるつもりのない呟きにも、妙な力が加わってしまふ。
都市と都市をつなぐ運搬船の乗場前で、青年は呟いた。強い風が
彼の長い白髪を巻き上げる。鋭い視線が都市の外を向けられていた。
乗船場でほぼ向かい合う形となっている少年と青年はそろって困
ったような顔をしていた。とはいえ、困っているわけではない。で
は、何を思っているのか。それがわからず、二人は困ったような表
情をしていただけだ。

青年が見つめる都市外には風が吹き荒れ、少年はそんな青年と、収
容される運搬船を見比べている。

その、次々と入ってくる運搬船の中身は人であったり物であつた
りする。二人も運搬船によって別の都市から入ってきたよそ者だ。

音が小さくなっていき、消えることはないまでも普通に会話がで
きるほどになった。

喉を鳴らすように笑いながら、青年が口を開く。

「それはそうと、愛しの彼女は大丈夫かい？」

「……ミーナなら、待合室にいると思いますか」

青年の挑発めいた発言に動揺することなく、少年は嘆息しながら
答えた。

「船酔いなら風に当たっていたほうがいいと思うけど……まあ、ち
ょうどいいや。君とは二人きりで話さなきゃいけないこともあるか
らね。王命だし、何しろ君も知つてのとおり、あの人の伝えたがる
内容は一般常識と少しずれてるから。一般人には刺激的だろう？」

「あなたがそう言いますか」

「君も僕も、モトランさんもベラリスさんも。他のメンバーだつて、
ずれてはいるんだよ？」

お互い苦笑しながら、この場にはいない者たちのことを言う。以前
はまったくできなかったことだ。

少年は特に青年と仲が良いということもない。モトランとベラリス、もちろんその他のメンバーも都市中の音を耳で拾うことができる。つまり、陰口とは言わないまでも、少し毒づくことさえできなかったあの都市から、二人は離れたところにいる。

「君は確かに追放処分だ。でも、それは君が悪かったわけじゃない。くじ運が悪かったただだよ。だからこそ、追放処分でも君には使命が与えられる。その内容はすでに王から聞いたね？」

「はい」

追放処分が決まったその日、告げられた。

「八剣は君がいなくなる十年の間に、おそらく別の者の手に渡るだろうね。けれど、そのときは取り返して。くれぐれも、腕をなまらせないで。と言うか、もっと強くなって帰ってきてね。『最高級の戦場』はもう終わっているかもしれないけど、そのときは皆でアーシユ・トラウイスティアを迎えよう。僕らなりの祝杯を挙げてあげるから」

「……はい」

そうだ、クレイネルはこういう人物だ。

改めて認識する。魔術師の中でも戦闘好きの部類に入るクレイネルは、結局アーシユの成長にしか期待していない。もっと言えば、強くなる可能性がある。その期待を伝えたい。ただそれだけの理由で、クレイネルはアーシユの見送りにきたのだ。

だが、呆れよりも安心が生まれた。

アーシユの故郷である都市が、平和都市と呼ばれる由縁。決して戦闘がないわけではない。いや、戦闘は他の都市よりも多いだろう。十三人の守護者と、一人の王。絶対的な力を持つ都市。それが平和都市。

たとえアーシユが抜けても、彼らは絶対に滅びることはないだろう。そう思った。

「八剣の性能を模した剣だ」
手渡されたのは一つの金属棒。

金属特有の冷たさではなく、どこか温かみのある金属棒。

召喚する。

今まで何度も見てきた剣身。材質から違う感覚はあるが、視覚的にはそれは八剣そのものだった。

「じゃあ、渡すものは渡した。僕は帰るよ。次の船を乗り過ぐすと帰るのに時間がかかりそうだ」

アーシュは頭を下げた。クレイネルが自分に背を向けて去っていくのがわかる。次に、霧のように姿を消したことも。

「ああ、楽しかったと言えば楽しかったよ。君のいた四年間」

何もない空間に声だけ残された。しかしアーシュはそれを拾い、返すことはしない。

歩き出す。待合室にいるだろうミーナを迎えに行き、そのまま船に乗るのだ。行き先の違うクレイネルとは別の船に。

「森林都市……」

それが、最初に向かう都市。追放された少年の向かう、一番目に選択された都市。

動き出した。

ブログ 開戦の証（後書き）

全ての皆様に初めまして！ となるはずです。

改めて、初めまして！ メビウスの回廊と申します。

連載小説ということで「Life to Door」をお送りします。

本日は二話連続投稿、更新は目標「二週間に一回」です。書き溜めの都合によっては目標は完遂されない場合があります。

できる限り、頑張ります！

01 森林都市イシュトナ

目に飛び込んでくるものは全て木だ。

全ての都市に張られたドーム型の膜。異獣と呼ばれる、人間と並ぶ世界の支配者の侵入を抑えるためのそれを抜けても、繋がった木々は途切れることなく続いていった。

地を走る船の乗員は、ほぼ全員眠っている。窓ガラスの外で延々と続く景色に飽きてきたのはアーシュも同じだった。アーシュとミーナが住んでいた平和都市にも木は多く生えているものの、連なつて森となつている場合はほとんどない。

まして、地上船に長い間揺られながら見続けるというのは、今までにない経験だ。

太陽の光は青々と生い茂る葉に遮られている。船体の温度は周囲の気温より低く、比較的安定した環境と言えた。

また、異獣に会うことなく来られたことも、乗船員にとって喜ばしいことに違いない。

海上を生きる海獣とはもちろん出会うことはないが、地上を生きる地獣に遭遇してしまう船は多々存在する。地獣ならば船の速度と質量兵器で振り切ることも可能だが、主に天上を生きる天獣を相手にすれば、船そのものが塵になるのも時間の問題にしかない。

都市間の移動には死の恐怖がある。

唯一の手段、運搬船での移動でさえ、完全ではない。

ふと、隣で寝息を立てていた少女がもぞもぞと動いた。

アーシュは彼女の毛布をかけなおし、額にかかってしまった夕焼け色の前髪を元の位置に戻す。

（命題なのかな？）

目をつぶる。

世界がいつから不便な世になったのかは知られていない。異獣の存在でさえ、各都市は大まかな認識しかなく、いつ生まれたなどと

いうことについての資料は一切残っていない。平和都市も異獣については研究が進んでいるが、それでもわかっていない。

ならば、それを解明するのが人類の命題なのだろうか。

魔術師という存在もそうだ。いつ、どこから生まれたのか。詳しいことは何もわからない。

ただ、異獣の存在とは違い、魔術師は人類の派生であるという感覚があった。実感で予測し、それが正解だと自然に世で肯定されていた。

魔術師は、魔力という本来人類の有しない力を持っている。それは異獣の出現が理由で、人類の一部が先天的に魔力を得、次第に魔術師と呼ばれるようになっていった。

それが世界の常識だ。

(……本当にそうか?)

疑問に思っても、覆せる根拠や理論がない。聡明な学者たちがあれこれ議論を繰り広げてても、所詮は空論に過ぎないとされてしまう。魔術師は自らの肉体に宿る魔力を使って、魔術という現象に変換する。自らの肉体に魔力を再度内包させて変化を与えたり、魔力を放出してエネルギーの具現化を行ったりすることができる。

しかし、古代の文書に記された、当時に想像されている魔法とは大きく異なり、何でもできるというわけではない。むしろ、夢物語の魔法は幻想で、血なまぐさい戦争で扱われるものが魔術であり、自然で普通。当然。

なぜなら、それは異獣の脅威から身を守るために与えられた能力なのだから。

それが世界の共通認識。

(きつと違う)

だが、覆されるかはわからない。古人の語る魔法を扱う魔術師がいたとすれば話は違うが、そんな人物がこの世にいるか？ その疑問に「はい」と返事をする魔術師はいない。

(どうでもいいのに)

どうしても悩んでみたくなる。考える時間はいくらでもあるのに。十年。その間、アーシュは平和都市の外で生きることになる。

何の罪も犯していないのにもかかわらず、アーシュは平和都市を追放された。

クレイネルの言ったとおり、くじで選ばれたから追放された。ただ、おおよそ四十分の一の確立が的中してしまった。ただそれだけの話だ。

平和都市では内乱を防ぐために、都市政に携わる人望が厚いものや実力のある魔術師四十人を選出し、くじで一人を選んで十年間追放する、という習慣がある。

赤い印のついた棒を引いたときにはさすがに驚いた。

（ああ、そうか）

運が悪かったのが罪。

ミーナを平和都市で守ることができないのが罪。

「最高級の戦場」を生き抜くという運命にはじきだされたのが、罪。（僕は別に、戦いたくて戦っていたわけじゃない）

アーシュはやがて来る睡魔に襲われ、それから解放されたのは約十五分後のことだった。

妙に長く感じられる十五分だった。

「はぁ……最悪の寝起きだわ」

そう言われましても、と思いながら、アーシュは自分の荷物を手に持ち、その数倍の大きさはありそうなカバンを背負う形で船を降りる準備を淡々と進めていた。

「責任、取りなさいよ」

やはり、そう言われましても、と思いながら、アーシュは苦笑を浮かべる。

二人とも、別の都市へと旅をするという経験は味わったことがない。戦闘で都市外に出たことがあるアーシュはともかく、ミーナは単なる一般人だ。環境の変化にはなおさら強くないのだろう。

運搬船を降りた二人を迎えたのは、先ほどまでも見えていた木々が青々と茂った寂れた乗船場だった。

「って言うか、ここ、本当に都市なの？ ただの森だったりしたら承知しないわよ」

都市じゃなかったら運搬船は止まらない。乗船場がなければ運搬船は止まることができないからだ。当然、乗船場は都市にしかなくそんなことはミーナもよく知っているだろうが、アーシュは何も言わないでおく。

あるいは都市を覆う膜、防御フィールドと呼ばれるそれを確認していれば納得もするだろうが、この少女は危機感なく眠っていたのである。

乗船場にはアーシュとミーナの二人しかいない。整備士でさえ、一人もいない。運搬船も、燃料の補給さえすることなく、別の都市へと向かってしまった。

「まあ、とりあえず道に沿って行ってみよう」
草が生えていない、足で踏み固められただけの舗装されていない道を往く。

ミーナの散々な罵倒を苦笑で受け流しつつ、歩調はミーナに合わせて確実に進む。

人の住んでいる場所が都市のどこなのかは、アーシュにも見当はつかない。

しかし、都市内に人が住んでいることは間違いないという確信があり、確信どおりに人が住んでいるのであれば、本気で探せば見つけ出せる自信がある。

アーシュを妬む魔術師は彼の確信や自信を慢心と言った。しかし、たとえ慢心であったとしても、アーシュは現実を作ってきた。

（ああ……向こうではそれを求められていたのかな）

不可能を可能にする。平和都市に求められたのは絶対の平和で、都市を守る一人の王とその側近十三名に求められるのは、任務の確実な遂行。

ある人は「一人で天獣と戦うことは無謀だ」と言った。しかし、それは覆される。

ある人は「そんなことができる奴は人間ではない」と言った。しかし、魔術師はそもそも人間とはかけ離れている。

「魔術師は人間ではない」

アーシュが八剣を手にしたとき、王はそう言った。

（でも、僕は生きている）

文句を連ねながらも歩き続けるミーナ。

苦笑を浮かべながらも歩き続けるアーシュ。

隔たりは、片や魔力を持たない一般的な少女で、片や膨大な魔力で幾多の敵を斬り倒してきた魔術師の少年。ただこれだけなのだ。

（僕は人間じゃない）

違う。言いたいことはそのままの意味ではない。

（僕や、クレイネルさん、ベラリスさん……………もちろん、王も人間じゃない）

彼らが織り成すのは人間の、普通の魔術師の業ではない。

「……………まぶしいなあ」

「……………バカじゃない？ 太陽、葉っぱに隠れてるわよ」

呆れ顔で言うミーナ。

その通り、太陽は並んだ大木に寄り添う葉で隠されていた。

一瞬の平和であったことを認識する。

「ひッ!？」

葉がうごめいた。

刹那でアーシュの後ろに身を隠すミーナ。いつもなら苦笑するところだが、アーシュは口元を緩めない。

先ほどまで浮かべていた笑みは一瞬で消え、腰に差していた剣を鞘から引き抜いた。

ただの剣だ。

八剣でも、八剣を模したものででもない。他の物の形をとっているわけでもない。途中で訪れた都市で購入した、市販の剣だ。

もしも戦闘になるのならば、制限のかかった戦いであることをアーシユは承知していた。クレイネルなら極限まで自分を追い込むためと思い、楽しみながら戦うのだろうが、アーシユはそんなつもりはない。

自分の力量のコントロールが目的。自分が所持している武器は、最高でも八剣の贋作なのだ。それは、いざというときに全開の魔力を扱うことができないということと同じだと考えていい。

ならば、レベルの低い武器でレベルの高い戦いができるようになる。

いい練習になるかもしれない。そう思った。

（動くか……？）

魔力で嗅覚を増強してみるも、草木のにおいと同調した何かを判別することはできない。

雑木林に隠れた気配は一つだ。群れでない以上、狼などの集団戦を得意とする動物ではないだろう。また、都市内ということもあり、地獣でもないと予想される。

魔力は感じられない。が、熟練した魔術師がその気になれば魔力の痕跡や自らに溜まる魔力を隠すことくらいは容易だ。もっとも、アーシユに対して隠すことができる者が相手であるならば、戦いの練習などと言っている場合ではないが。

（人………？）

あるいは、アーシユの想像を超えた敵か。

茂みから見えた光は一瞬。

「人だッ！ ミーナ、もつと下がって！」

懐に飛び込んできた刀を剣の腹で受け止める。弾き返し、その人を奥側へと帰す。

人は女だった。

（きつと強い！）

魔術師には違いない。しかも、魔力が溜まっている様子を確認することはできなかった。前述の通り、手練であると予想される

どちらかといえば長身で、アーシュより少し小さいくらい背丈だ。それでも、ミーナよりも高く、運動能力が高そうな印象がある。胴体はマントで覆われていた。少しだけ空いている隙間から見えたのは、軽そうな鎧と鞘に収められたもう一本の刀だ。

（二刀使いかも）

しかし、近接戦を望む人物にしては髪が長すぎる。一本にまとめられてはいるが、紺色を宿すその髪は腰の高さまでであるように見えた。

最後に顔つきを確認する。

目つきは本来良いほうなのだろう。キツと見据える眼には決意のようなものが混じっているように見えるが、反面、優しさも映し出されている。

笑顔が似合いそうな口元も、今は食いしばられていた。

（もしかして、この都市の守護者みたいな人なのかな）

半ばそう結論付ける。単に盗賊というわけでもなさそうで、立ち振る舞いにも一本の芯があった。

それに、森林都市に関して悪い噂は聞かなかった。ただし時代から取り残されている、ごく普通の都市だとしか聞いていない。地獣などが襲ってきたこともほとんどないようで、平和都市の名はイシュトナに似合うのではないかとさえ思えるほどだ。

最悪の場合、殺してしまうかもしれない。何しろ、強そうだ。こちらが殺されては元も子もなく、さらにミーナを守りながら戦わなければならないという制限の下、全力で戦った場合、殺してしまう確立のほうが高いだろう。

（それはできないよなあ。なら……）

全力が出る前に気絶させる。

じりじりと距離を詰めていく。本来、強者同士の戦闘には見られ

ない光景だ。

だが、それを行う。相手の焦りを狙う。自らの経験が劣っているとは思わない。不安は排除する。

魔力を自らの中で高めていく。より体の奥まで、濃密に。

今すぐにでも飛びかかれる位置になったときだ。

「ふん。君は凄いな」

急に称賛された。

女性の戦闘態勢はすでに解かれ、ぶら下がった腕は動くそぶりを見せない。

「……………え？」

アーシュとミーナの眩きが重なる。しかし、アーシュは戦闘体勢を解かないまま、ミーナはアーシュの後ろに隠れたままだ。

「その男子。君は年齢以上の経験を積んでいるな。その女子を地獄から守りながら戦うことくらいはわけなさそうだ」

「はあ……………」

中性的な口調で何やら褒められている。嫌な気分ではないが、変な気分だ。

（悪い人では……………ないのかな？）

いきなり襲われたことに納得はいかないが、今の彼女からは敵意も殺意も、魔力をためている様子も見られない。

しばし、時が流れた。女性がアーシュの体を舐めるように観察する。アーシュは抵抗せず、成り行きを見守ることにした。変な動きを見せれば斬ることができる自信があつたからだ。

「そうだな。君ならあるいは、エルデさんの代わりを務めることができるかもしれない」

「……………エルデ、さん？」

ミーナが戸惑った様子で女性の言葉を反復する。その行為に効果はない。

エルデという人物が誰なのか、アーシュにも見当はつかなかった。女性は刀を鞘に納めながら続けた。

「うん。とりあえず、ようこそ。森林都市イシュトナへ。手荒な歓迎をして悪かったな」

手を差し出してくる女性の手を、アーシュは警戒しながら受け取った。続いてミーナも、彼女としては珍しくおずおずと握手する。

「まあ、私もよそ者なんだけどな」

快活そうに笑う女性はシャナルと名乗り、二人に自己紹介を促した。アーシュは簡潔に自己紹介をし、あとはミーナの長い、長い自己紹介に耳を傾けつつ、「イシュトナを案内しよう」というシャナルの後ろについていった。

01 森林都市イシュトナ（後書き）

というわけで、次回更新は8月6日を予定します！

読者のユーザ様の感想や応援などが励み、活動原料となりますので、よろしければお願いします。

02 消えた子供たち

そこは一つの村のようなものと言ってもいい。

都市と呼ぶには整備されていない道路。人がいない乗船場。極めつけは森の中にポツンとある、規模の小さな生活地帯。

アーシュは一件の民家にいた。ミーナとシャルは他の民家を回っている。

「はあ。しかし、ご覧のとおり、ワシらにはそちらの都市に提供できるものなど何もありませんぞ」

リーダーらしき老婆はしわのある顔をさらに歪めながら答えた。

「……………僕もそうは思うんですが」

若干失礼かと思いつつも、正直な感想がそれだ。

都市間による貿易は積極的に行われる。都市の商人は遠い地まで売り物を仕入れに行くことが難しいからだ。都市に隣接している木々などは採集することもできるだろうが、そもそも周りに木が生えていない都市などは木材を得るために他都市に貿易を申しでる。

しかし、イシュトナは貿易ができそうな状況とは思えなかった。

人が足りないというのもそうなのだろう。外を見回しても、家と見られる家は数えられるほどに少なかった。

また、乗船場の手入れをしていないのが他の都市との交流の少なさを如実に表している。

「僕は貿易商ではないですから、あまり詳しいことはわからないのですが、王が友好を求めているということだけはご理解ください」

できるだけ丁寧な言葉を選んだつもりだが、戦場に身を置いているために教養は足りていないと自負している。

老婆の顔色が変わらないことで初めて、安堵の息をついた。

（それにしても）

貿易のために友好を求めているということはないだろう。

王が侵略でも考えているとも思えない。都市を侵略しようと思え

ば、イシュトナ以外の、メリットの多い都市を侵略することだってできるだろう。

それをしないということは、すなわち本当に何かしらの理由で友好を求めているということだ。

なぜ友好を求めるのかは、どう考えてもわからないが。

「しかしです。現在、イシュトナは都市存続の危機に晒されておるのですよ」

老婆は苦りきった顔で、うめくように言った。

考えを止め、老婆の言葉に耳を傾ける。

「住んでおる者の中で、もっとも強いエルデという魔術師がおるのですが、以前、怪物と戦ったときに怪我を負いましたのう。その怪我は治ったのじゃが、意識が戻っておらんのです。ああ、怪物との戦闘中にケガを負ったそうですよ。そこにおられるシャナル殿が窮地を救ってくださったの。おかげで都市の危機は過ぎ去ったかと思ったのですが、どんな怪奇か、村の子供が次から次へと姿を消し始めたのです。それはちょうどエルデが気を失って三日経った後でしたかの。どこへ消えたのか、シャナル殿と共に検討しておったのですが、シャナル殿が都市中を探し回っており、この守りができぬということで我々はとても困っておりますのじゃ。今までもシャナル殿には搜索にあたってもらっておらぬ。全てはエルデが目覚めてくれれば話が早いのですが、一向に目覚めぬ様子で………」

「要するに、あのばあさんは助けてもらいたいわけだ」

老婆の長い話が終わり、日が沈みかけた頃。アーシュとミーナ、シャナルの三人はシャナルが寝泊りしているという元空き家に集まっていた。

一番長い戦闘で四日間続き続けたことがあるアーシュだが、先ほどまでの老婆との会話は無限のものに感じられた。どうも旅に出てから時間が経つのが遅く感じられる。追放年数が十年というのが重くのしかかっているのかもしれない。

疲れているのが顔に出たのか、シャナルが「あ、座ってくれ」と席を勧めてきた。ずうずうしくも、ミーナは先ほどから座っている。床に置かれた木製のコップに注がれた水を一口飲み、シャナルは再び口を開いた。

「というより、これは私からも頼むべきことなのかもしれない。エルデという魔術師は確かに腕も立つようだが、意識がないんじゃない話にならない。協力してくれないか？」

場の空気は若干ぴりぴりしている。

その原因ははっきりと明らかで、アーシュは原因の不機嫌ミーナそうな顔にかける言葉を搜していた。

しかし、見つかるよりも前にミーナが口を開く。

「協力っていったいなに？ って言うか、アーシュ。こんなことになったのはアンタの責任なんだから、アンタがやりなさいよ」

「言われなくても僕がやるしか……」

「口答えしない」

「……………はい」

理不尽だ。驚くほど理不尽だ。刺すような視線を浴びるたびにそう思う。

そこに割って入ってくれる存在がいなかったというのが、なおさら辛かった。「二人で話し合っているところ、悪いが」と介入してくれるシャナルの存在が救世主のように見える。女神のようにさえ見える。

「私はここに残ってエルデさんの様子を見ている。すでにいくつか見当はつけてあるから、二人でそこに向かってほしい」

「ちょっと待ってください」

挙手して発言の許可を求める。一瞬、初等学校に通っていた頃を思い出したが、すぐに振り払った。

特に何かを言われることもなかったので、アーシュは疑問を口にする。

「見当って、どういうことです？」

「今から説明する」

特に不機嫌そうな様子もなくシャナルは答えたが、ミーナには琴線に引かかる行動だったのか、無言でアーシュの両頬をつまむ。

そのまま、ぐにぐに。

「いふあい、いふあいよ！」

「いいから黙ってなさい。アンタは色々先走りすぎなのよ」

ミーナに言われたくない、とは思うものの、マトモに発音できないこの状況、口にしても理解できる言葉になりそうもなく、回転運動が加わるだけだろうと思って口をできるだけ閉じる。

「君たちの仲がいいのはわかったから、聞いてくれ」

「ひよくないでふよ！」

「黙ってなさい！」

「いふあい、いふあい！」

「とりあえず、離してあげてくれ。話が進まない」

シャナルから憐憫の視線を受ける。ミーナは頬をはじくようにして離れた。

アーシュは少し赤くなった頬をさすりつつ、「それで、なんです？」と先を促す。

「……よし。では、どのタイミングで言っても驚くだろうから率直に言おう。この件には異獣どもが絡んでいる」

「……………」

あっけらかんとした様子から球に神妙な面持ちで告げるシャナルに対して、アーシュとミーナは沈黙を保った。

やっぱりそうか。

異獣にも知恵を持つものがある。天獣が主だが、地獣や海獣でも知恵を使って生きているものが存在し、彼らは人間と戦うときにもその知恵を応用する。

最近では、人の言葉を喋る異獣も現れたという噂が流れるほどだ。「何の目的かはわからないが、子供を連れ去ったのは彼らに違いなし。そこで、私は住处となっていそうな場を探っておいた。二人で

そこを回っていつてくれ。子供達を助けられそうなら助けても良い」
シャナルが一枚の紙を取り出す。都市の地図のようで、ところどころに印が打ってあった。アーシユはそれを受け取る。

難色を顔で示したのはミーナだ。

「私はお断りよ。アーシユ一人で行ってよね」

罵るような口調でミーナは言った。

その言い分はアーシユにもわかる。ミーナは一般人であり、異獣が関わるならば、本来逃げ回る側の人間だ。

平和都市では、異獣の襲来時には一般市民は地下街へ避難していた。異獣の恐怖を間近に経験したことがないのも手伝って、危険なところまで行きたくないのだろう。

シャナルは少し悩むそぶりを見せ、しかしそれでも考えが変わらないのか、申し訳なさそうにミーナを見た。その視線を受けてミーナは「う」とたじろぐ。

「いや、できれば二人で行ってもらったほうが助かる。いざというとき、私も動きやすいからな。それに……」

それからシャナルはニヤツと笑いながら、アーシユを見て続けた。
「地獄からなら守りながらも戦えるだろう？」

見透かしたような笑みに苦笑しつつ、アーシユはうなずいた。ミーナもしぶしぶ首を縦に振る。

しかし、疑念は晴れない。

ブラックボックス

その疑念は黒箱だ。答えを出してはいけない。直感的にアーシユはそう思った。

知りつつも、気分は徐々に憂鬱になっていく。

腰に下げた剣がとても重く思えた。

それを感じることができたのもただの一瞬。

「シャナルさん、ちよつと！」

年配の女性が飛び込んできた。思ってもいなかったのだろっ、シャナル以外の人物に一瞬硬直したが、すぐにシャナルの腕を引っ張り始めた。

シャナルが有無を言わされずに連れてかれていく。

その様子をポカンと見ていた二人もまた硬直したが、気を取り直して二人を追いかけた。

少しの林を抜け、アーシュたちがたどり着いたのは畑。

荒れ果てた、本当に荒れ果てた畑だった。

「まさか……」

植えられていたと思われる作物が散乱している。

シャナルは体を震わせて地に伏せ、次々と地中を調べていく。

「くそっ！」

短い叫びにはわずかながら魔力が込められていて、畑を小さくえぐった。

シャナルは手元に落ちている作物をつかみ、立ち上がってアーシュの横へくると、それを勢いよく見せ付けた。

「地獄にやられた」

疲れと怒りの混ざったようなため息と言葉が吐かれ、二人は何も言えずに固まってしまう。

「このままじゃ子供も作物も失われてしまう。一刻も早く、奴らを何とかしないと……」

尻すぼみになっていく言葉には、懇願が混じっていた。

夜が明ける。

作戦決行のときだ。

アーシュはミーナを抱えながら、木々の間を走り抜けていく。

熟練した魔術師ならば、ただ普通にしている生物の気配は簡単に察知することができる。たとえ黒幕が気配を消すことをしていたとしても、子供たちの気配が消えることはない。

しかし、捉えられないとはどういうことか。

都市が広いということもある。都市全体に散漫する生物の気配が混じり、性格に察知できていないのかもしれない。

だが、アーシュは別の予測を立てる。

「バカ」

叩かれた。

体勢が体勢なだけに、ゆるい拳だ。痛くはない。

「物事を悲観的に捉えるのはアンタの悪い癖よ。直しなさい」

「でも……」

「いいから。信じなさい。とりあえず、しらみつぶしに探すわよ」

勇気付けられるような、それでもやはりどこか理不尽な言葉に微笑を浮かべてしまう。

「何笑ってるの？」

「いや」

印は十箇所だ。

ミーナの体に負担がかからない程度の速度で走り、次々と印のあたりの搜索を繰り返す。何も無いことを確認すると、別の印に向かつて走り出す。

これを九度繰り返した。

「……………いた」

声が小さくなる。木陰に隠れ、その生物の死角で二人は座っていた。

生物は洞窟の穴を塞ぐようにして座っている。

効率よく探すために印から最も近い印へ行くという方法をとってはいたが、確率的には十分の一だ。十度目にして、やっと当たりを引いたことになる。

（ホント、くじ運悪いよなあ）

当たりたくないものに当たり、当たりたいものに当たらない。

運が悪いことが罪。

「ミーナはここで待ってて」

「言われなくてもそうするわよ。アンタが死んだら、あのド田舎まで帰れなくなるんだから、その化け物をさくつと倒しちゃいなさい」

「言われなくてもそうするよ」

飛び出す。

見えた。そして見られた。

地獣。外見からして間違いない。

体を覆う殻は褐色を帯び、まるで鉄の鎧がさびたようだった。体は年月が経っているのか、皮膚が剥がれ落ち、赤黒い血管が表面を走っている。

しかしそれでも、剣が容易に通る硬さではないだろう。

地獣はアーシュを舐めるように見つめる。

「ふうん？」

小さな呟き。そこに威厳のようなものは感じられない。軽い調子だった。

腰に下げた剣は四本。その中から特に選ぶことなく一本を抜く。

「オイラと敵対するかい？ 困ったな。あの方には、人間が来たら通せって言われてるんだ」

やはり軽い調子で。困った様子はなく、地獣が指す「あの方」の言葉を守る様子は見られなかった。

「子供達は？」

「中にいる。そこからは見えないかな？ オイラは結構体が大きいからねえ。オイラがどくと、洞窟があるんだよ」

わざとらしく腕を振り回す。それだけで砂埃が立ち、木々はざわめき始めた。

「まあいいか。そもそも、オイラたちの役割は本来こんなものじゃないもんな。まったく、あの方の考えることはわかんないよ」

二人の間で火花が散った。

大きく後退する。

「お前たちは生きることが使命か？」

剣を構える。その動作はすでに一撃を放つ準備に集中されていた。

「人間も同じだ」
ほくたち

放出系魔術、波紋突。
はもんつ

剣に封入されていた魔力が、切っ先と地獣が触れた瞬間に爆発す

る。一瞬だけ高熱が発生し、切っ先を中心に光が歪められ、波紋のようになつた。

地獣の体に穴が開く。手前は大きく削られ、奥に行くほど穴は狭まっていく。長いトンネルの入り口に立ち、出口を見ている状態と同じだ。

「……ふうん？ まあ、飽きはしていたからな。これ。オイラの分まで老い先楽しんでくれよ」

驚いた様子もない。自分の体を開いた穴を客観的に見たようだった。

不気味だとは思う。

「いちいちうるさいな」

飛び上がる。

空中で一瞬、静止。剣に魔力を込め、叩きつけるように振り下ろした。

放出系魔術、たきおろ滝降し。

光を帯びた剣が地獣の頭部を斬り裂き、沈んでいく。体を重力に任せ、ただし勢いは殺さない。

地面さえ斬り裂かんつもりで、体に溜め込んでいた魔力をより剣に注ぎ込む。

着地。

同時に、剣に異変が起き始める。

真つ二つに斬り裂かれた地獣はすでに原形をとどめていない。そこに剣を投げつけた。即座に代わりの剣を抜く。

投げつけた剣から漏れ出した魔力が光となり、爆発する。爆発した剣の破片を手にした剣で叩き落とし、煙に巻かれた地獣を確認した。

動く様子はない。

「うん。いいよ、出てきて」

剣をしまいながら、物陰に隠れているミーナに向かって声をかける。

「ま、間近で見ると……なかなか凄いわね」

驚いた様子でアーシュを見つめるミーナを見て、アーシュは軽く首をかしげた。

（規模は小さいほうだと思うけど）

一方的な戦いすぎて、規模が大きかったという感じはしない。

しかし、一般人の感性はそんなものかもしれない。なにせ、平和都市で頻繁に発見される地獣でさえ本物を見たことがない人物だ。とすれば、魔術師がそれと戦う姿を見たこともないことになる。

「見直した？」

ちよつとした気持ちで訊いてみる。

ところが、ミーナは鼻を鳴らしながら答えた。

「……二十七点で赤点ってところかしらね」

「厳しいなあ」

幼馴染の厳しい採点に驚きながらも、アーシュの顔は自然とほころんだ。

二人は地獣の死体を避けながら、洞窟の中へと歩き始める。

光なきはずの、闇ありきはずの場所。その奥へ向かって。

02 消えた子供たち（後書き）

二週間ぶりです。ギリギリ間に合った……。

今度の更新は八月二十日予定です

03 流浪者の告白

「……なによ、これ」

洞窟の中に入れば、生きる人間の気配ははつきりと感じられる。死んでいるわけではない。そういう確証はしていた。

その確証は当たり、しかしアーシュとミーナは目の前に繰り広げられている光景に驚かされる。

子供は十四人いた。

生後からそれほど経っていないと思われる赤ん坊やアーシュよりも少し小さいぐらいの子供もいる。

「……お兄さんたち、だれ？」

こちらを見て、年少の男の子が一人呟いた。その一言でいつせいに視線が集中し、アーシュはなんとも言えない気持ちになっってしまう。

そこは洞窟の中とは思えないほど、光に満ちていた。

子供十四人が入れる大きな空間があり、そこには子供達の遊び道具と見られるものが転がっている。部屋とも呼べるこの場所の片隅には、食料が大きな布の上に乗っていた。

おかしいことに、さらわれたというわけでもなさそうな生活環境だった。

「私たちはね、助けに来たの」

言い聞かせるように、ミーナは子供にもわかるような説明を始める。

子供の対応が得意……というよりかは、他人を子ども扱いするのが得意な彼女だ。子供相手は楽なのだろう。いつかもこのように、天獣の襲撃に怯える子供達をあやしていたような記憶がある。

アーシュはその様子を見守ることにした。自分が口下手であることはしっかりと自覚している。

「お父さんもお母さんも待ってるわ。いつからここにいるの？ 洞

窟探検ごっこも楽しいかもしれないけど、親に迷惑をかけるのはルール違反じゃないかしら」

子供たちはさらわれてここにいるはずだ。しかしアーシュは口は閉じたまま。

さらに言うなら、親に心配をかけながら家を出た彼女はルール違反ではないのだろうか？ いずれ、突飛な行動に出た理由を訊いてみたいアーシュであったが、今は口に出さずに黙っておく。

子供達はミーナを取り囲むように座っていた。

「シャナルお姉ちゃんも、待ってるの？」

十四人の子供の中では年上に値する少女が訊いてきた。

「そうよ。シャナルさんも、あなた達が心配で仕方ないの」

毅然とした態度で、その質問を待っていたかのような口調で畳み掛ける。

しかし、その言葉を受けてなにを思ったのか、子供達はざわつき始めた。

アーシュはここで初めて、「どうしたの？」と声をかける。

「お姉ちゃん達、嘔吐きだ」

一人の女の子が口を開いた。

「シャナルお姉ちゃんが『ここで待ってて』って言ったんだもん」

「……………え？」

呟いたのはミーナ。

アーシュは考えないようにしていた予感までも的中したことを悟る。

見えない天を仰いだ。

ミーナが再び子供達と話し始める。宥めようと、その上で正確な話を子供達から聞き出そうとするものの、子供達がばらばらに言いたいことを言い始めたため、ミーナはかなり混乱しているようだった。

その様子を見て、アーシュはミーナに近づいていく。

耳元で小さくささやいた。

「表を見てください」

そのまま出口へ向かって歩き出した。

「はあ！？ ちょっと、アンタも手伝いなさいよ！ 状況説明！
あ、こら。私をおいていかないでよ！」

歩き出したアーシュを声でひきとめようとするミーナの必死さに
負けたのか、あるいは後が怖いとでも思ったのか、アーシュは上半
身だけ振り返って言葉を返した。

「いや、ミーナはここにいて。そして、なにがあっても皆出てきた
らダメだ」

少し強い口調で告げる。真剣である様子が伝わりにくいアーシュ
がよく行うことだ。

次は振り向かない。そう決めてアーシュは出口に向かって走り出
した。遠くからミーナの怒声が聞こえてくるが、今はどうでもいい。
走り続ける。

だが、怒声や足音をかき消すように、魔力で強化していた耳は更
なる轟音を伝えてきた。

それは断末魔の叫び。

洞窟が壊れてしまうのではないか。そう思えるほど大きな、断末
魔の叫び声だった。

叫んでいるのはあの地獣しかない。

つまりは、死んでいなかったのだ。

おかしいとは思っていた。何故あれほど抵抗なくやられたのか。
人の言語を喋れるほど知恵を持っているのならば、すんなりとやら
れることなく、巧妙な戦いをしてくるはずだ。

しかし、それはなかった。

それが罠だ。巧妙な戦いの一つだったというわけだ。

とすれば、当然の疑問にたどり着く。

なぜ今、その地獣は叫び声を揚げている？

出口を目の前に、迷うことはない。

剣を抜いて、太陽の光を浴びに出た。

地獣は絶命したらしく、地に横たわっている。

それを蔑むような目で見下ろす人が、一人。

「君に敵意を見せなければ、こんなことにもならなかったんだろうが……どうしてか、こいつらは頭が悪い。命令したことも忠実にできないものか？」

半ば諦めたようにため息を吐いた。一本の刀が地獣の緑色をした血で染められている。結ばれた黒髪がゆれ、艶は太陽の光を妖しく跳ね返していた。

「やっぱり、あなたですか」

アーシュもため息を吐きながら、わずかに悲しみを込めて言った。「やはり気づいていたか。まあ、我ながら露骨ではあったかな？」

いつから気づいていたのか教えてもらっていいか？」

微苦笑する女性。ある種の可愛さを思わせるその笑みになにが隠されているのか。それを知るまでは気を抜くわけにはいかない。

「案内されて、お婆さんの話を聞いていたときからです。内容はあなたも知っているでしょう？」

彼女の持つ魔力ならば、民家の外から中の会話を聞くぐらいは容易でできるはずだ。

そして、全てが噛み合っている。不審な点が齒車を合わせるように事実と合致した。

その後の、彼女の不自然な言動もまた、彼女であれば納得もいく。

「ああ、知っている。聞いていたさ」

ため息を一つ吐き、シャナルは続けた。

「そうだ。イシュトナの子供達をここに住まわせたのは私だ。その、命令を聞けないクズを殺したのも私。エルデさんが異獣と戦うよう仕向けたのも私。怪我を負い、さもそれが原因のように見せかけて意識不明の状態にしているのも私。」

「私が黒幕だよ」

歯を食いしばる。理由は簡単だ。
なぜ、そんなことを？

目で問いかける。闇に落ちた、暗い目で問いかける。

「私は天獣だ。知恵を持ち、ここらいつたいの異獣どもを束ねる権限を得、イシュトナを支配するように差し向けられた天獣。わからないかもしれないが、異獣にも組織つてものがあるんだ」

淡々と言い連ねたシヤナル。

「まさか天獣が人間に化けれるなんて思いもしなかった」

冷たい物言いに変えるアーシュ。もしその話が本当だとすれば、目の前にいる彼女は敵で、殺すべき相手だ。殺すべき相手に情は絶対に持たない。昔からの習いだった。

「そうじゃない。私は人間でもある。魔力を持っているのがいい証拠だ。確かに天獣には特異な力を持つものもあるが、人に与えられた力は有していない」

千の戦を経験したアーシュであっても、天獣の生態を把握できない。姿も能力も、個体によって違うのが天獣で、だからこそ厄介にして強いのだ。

人間と天獣の共存体がいるということは初めて知った。

驚愕しながらも、疑問が口を動かしていく。

「あなたは差し向けられたと言った。いったい誰に？」

「さあな。そういう使命が私の中に現れたんだ」

とぼけている様子はない。嘘を吐いているようにも見えない。

代わりに、渋面していた。

「終わらせたかったんだ。私の使命を終わらせるには、エルデさん以外の、腕利きの魔術師が必要だった。そのクズを殺せる程度には強い人材が必要だった。こいつさえ殺せば、後はもう問題ない」
涙が流れていた。急だ。しかし確かに二筋、液体が目から溢れ出ていた。

「子供達をよろしく頼む。皆のところへ無事に届けてやってくれ」
懇願といった様子ではない。友人に頼みごとをするような雰囲気
をまといながら、シャナルはそう言った。

彼女には似合わない振る舞いだった。

そしてアーシュには戦闘の経験から得た、似合わない動作の裏を
読む特技がある。

「死ぬつもりですか？」

「斬ってくれ」

アーシュの問いに間髪いれず、シャナルは答える。

いや、それは答えではない。ただ、死を望む。自ら死のうとはし
ない。

「クズはお前だ」

アーシュの答えは、それだ。

虚を突かれたようにシャナルは固まった。先ほどのざんげの気持
ちが消え、震えが襲う。体をわなわなと震わせて、今にも飛び掛か
り、バラバラにしてやろうという目でアーシュを睨みつけた。

「僕はあなたを斬る気にはなれない」

対して、アーシュの目はさらに暗く沈んでいた。冷えた瞳でシャ
ナルを見つめる。

「天獣おまえに言っているんだ。ついでに、天獣おまえをシャナルさんに刷り込
んだ天獣おまえの上位存在にも。天獣おまえがこれ以上好き勝手やるとしたら、
今度こそ、器ごと僕が斬ってやる」

アーシュの瞳はシャナルの瞳、さらにその奥に潜むものを見据え
ていた。

シャナルは動けない。アーシュの瞳がそれをさせない。心の隅々
にまで渡る、彼の聞こえが良い甘いセリフがシャナルの体を支配し
ていた。

アーシュが視線をほどこまでそれは続き、終えられたときにシャ
ナルは安心したような吐息を漏らす。

その中でアーシュは口を開いた。

「地獣も斬りましたし、あなたがここを支配する天獣である必要はもうありません。ここを離れるつもりであれば、僕から提案とお願ひなんですが……」

おずおずと切り出すアーシュを見て、シャナルは驚いた。先ほどの、強気に満ちていた全てがまったく見られず、同じ人物かどうかさえ疑いたくなるような態度だったのだ。

「提案っていうのはですね、もし行くあてがなければ、僕たちと一緒にに都市を回ってほしいんです。ミーナの護衛というわけではないですけど、危ない目に合わせてもいけないですし」

さらに驚く。

だから反論してしまう。

「私は天獣だぞ。本気で言っているのか？ いや、それよりも、そんなことになれば君たちにも危害が」

その反論をアーシュは手で遮った。そのまま、微笑みながらシャナルの前で腕を組む。

「あー、でも、シャナルさんがいないと他の都市の人が困るなあ。だって、いつ黒幕が出てくるかわからないし、また天獣あれの役割に沿うことになるかもしれないです。でも、僕と一緒にいれば、危険はないですよー。自慢じゃないですけど、どんなことになったって僕が何とかしてみせますから。……………何より、ミーナと二人きりっていうのは心が折れそうですし」

「……………あー」

感動やら反感やらはどこへやら、シャナルは再び憐憫の視線をアーシュに投げかけ、束の間の後、ぽんと彼の肩をたたいた。

出航の朝。

食料や衣服などの準備を終えて、アーシュとミーナ、そしてシャ

ナルの三人は乗船場で運搬船を待っていた。

子供達の失踪という事件が解決して不安がなくなったのか、乗船場は人こそいないものの、最低限の手入れがされていた。

「黙って行つていいのか？」

「そのほうが、皆幸せよ」

真実を言えば蔑まれるかもしれない。卑怯者と罵られようと、不都合なことは言わないほうが良い。裏切り者と罵られるよりは良い。これがアーシュとミーナの結論だった。

裏切り者という名目がどれほど大変なものなのか、二人は知っている。

ちなみに、ミーナにはシャナルが天獣であつたことを伝えなかった。それもまた、言えば不都合になるかもしれないからだ。

外見的には人間で、身体能力も人間のそれだけにとどめておけば何の問題もない。そう判断した。シャナルにそれを伝えたと、彼女もまた了承した。

ミーナを納得させるための「都合の良い話」を考えるのが一番の苦労だったと思うと、脱力感と共に妙な笑いがこみ上げてくる。

「それにしても、エルデさんには結局会えなかったわね」

「ああ。私も会話したことはないからな。まあ、余計に会話して余計な感情を作る必要もないだろう」

「……そんなものなのかしら」

仏頂面で物思いにふけるような仕草をとるミーナ。

そんなものなのだろうか。

戦闘はともかく、旅となるとアーシュもミーナと同様に経験が浅い。知識という意味ではミーナにも劣る。

「そんなものなんだよ。きつと」

アーシュは決心するように呟いた。

優しい笑顔で二人に振り返る。

二人の顔の硬さが抜けていく。二人は決して笑顔ではなかったが、それでも、瞳は澄んでいた。

目にはアーシュの顔がはつきりと映っている。

「次は砂漠都市に行こうと思うんだけど」

舞台は向けられて。まだ先は長い。

03 流浪者の告白（後書き）

第一章本編はこれで終了です。少し急ピッチになってしまいました。

あとはエピソードが入り、おまけ的な短編が少し入ります。

エピローグ

半裸、さらに髪の毛一本ない頭の老人が一人、外縁部分に座っていた。

都市と世界を隔てる膜、ドーム状の防御フィールドの境に座っていた。

日に焼けた黒い皮膚はほとんどむき出しにされており、彼の白いひげだけが太陽の輝きを跳ね返しながら輝いている。焦げたような色合いの布が下半身についているだけで、衣服と言えただけだった。

老人は建物の屋上……いや、大きな壁の上だ。本来は建物でも何でも無い。そんなところに座って、ただ黙々と呼吸を続けているだけ。生命維持活動として欠かせぬそれを、意識して繰り返し行っているだけだった。

しかし見る人が見れば、この老人を中心に魔力が渦巻いているのが見えるだろう。

大気に微量な魔力が混じり、老人に近ければ近いほど濃度が増していく。

「ひとたち一太刀」

彼の愛刀だ。

布切れでできた一つのお守りが姿を変える。

布がほどかれ、大気に巻きつくように柄が生まれる。続いて刃が生まれ、鏢のない刀が召喚された。

老人は垂れ下がったまぶたによって開ききらない目でそれを見つめる。

慈しむような目だ。

彼がなでるように刀を眺めているのも、そう長くはなかった。大気に溶け込むようにして存在する一太刀に、変化は伝わる。さらに振動。空気の震えが魔力の混じった大気という、老人の新たな

感覚器官のように変化を伝えてきた。

紛れもなく信頼できるものである。

「来おったか」

雲ひとつない青空から突如としてにじみ出るように現れた物体。空が澄んだ青からよどんだ褐色に移り変わっていく。じわじわと、じわじわと溢れ出てきた。

何者かが出現を知らせる。しかし、降下してくる褐色の生物が鳴らす轟音にかき消されて、老人の耳には届かなかった。

他の誰よりも近くで見ているのだ。老人には知らせの必要性がない。

そして、老人は自分が気の長い性ではないことを理解している。だからこそ、待ちわびた存在に笑みで迎えてしまう。

笑みを浮かべ、それを見上げていた。心を高鳴らせていた。年甲斐もない興奮が体を満たし、魔力もまた、彼の体を満たしていく。

「竜……か？」

少なくとも、形はそうだ。大きな翼。顎に角。口は大きく開かれていて、胴が非常に大きいことが確認できる。

昔、本で読んだ記憶があった。おぼろげながらに覚えているのは、それらははるか昔に滅び去っているものらしいということだけ。伝説として語り継がれている程度で、対処法などは記載されていないかったはずだ。

一瞬だけ過去に思いをはせ、意識を引き締める。

後ろには都市があるため、老人は跳躍し、前へ。

竜と真正面から対立する形になる。

「ふむ……………」

うなりながら、刀身をどこに食い込ませるか考えていた。

竜の鼻息が体をなでる。緑色の瞳が老人を見据え、むき出しの歯が向けられる。

天獣ではないとわかっていても、竜は常識の範囲内の形状をしていた。そのことに、かすかに安心感を覚え、同時に失望感を見つけ

出す。

異獣の一般的な色である褐色は腹にのみ広がっており、残りは紫色で覆われていた。殻ということではなく、単純に皮膚の色がそうであるらしい。

（確かに、見たことはないな）

長い年月を生きていても、竜の形を持ち、皮膚が紫色であった生物は記憶にない。

つまり、この生き物が「最高級の戦場」の一だ。

「ふん」

鼻を鳴らすも、心は躍る。年をとったその体の中で渦巻く魔力に新鮮ささえ感じる。

それを打ち砕くように、竜は吼えた。

地が波を打ちそうなるほどの空気の振動が老兵を襲う。

その中で刀を振るった。

放出系魔術、布刃。ふじん

一振りで生まれた斬撃が細かな大気の乱れとなり、咆哮を打ち消していく。刃膜は彼の座っていた位置の大気まで張られ、威力が弱まりに弱まった咆哮は防御フィールドにぶつかって砕け散った。

都市は無事である。

しかし、老兵の体に襲い掛かった空気の大砲は服を裂き、皮膚に浸透していた。切り傷が数箇所につき、そこから流れる血液が老兵をさらに

「くくッ」

高揚させていく。

放出系魔術、刃粉。じんぶん

やはり一振りから生まれた斬撃は大気にまぎれる魔力を通じてほとんど威力を落とすことなく細かな無数の線と変わり、竜の体を包む。

そのまま、老兵の刀が数回空を斬った。

放出系魔術、刃固め。やいはがた

魔力を含んだ大気が命を持つかのようにうごめき、竜を取り巻いた。形作られた斬撃の竜巻が竜を飲み込み、斬り裂いていく。

竜の叫び声すら、風の音にかき消されていく。

やがて、風の音は先ほどの咆哮よりも大きくなった。

魔力という名の気体が竜の周りを埋め尽くし、その気体は老人の思うがままだ。

しかし、それはあくまでも老人の力量が相手を上回っているからのこと。

異変はすぐに気づけた。

竜が竜巻への抵抗をやめる。同時に中に熱がこもっていくのがわかる。

「まさか」

気づいた刹那、放たれた。

炎は玉となり、竜巻を突き破った。その衝撃で竜巻は消滅し、竜の姿が現れる。皮膚から緑色の血が流れだし、息遣いもさらに荒い。老人はあと一撃もあれば殺せると読んだ。

しかし、その一撃を打てるかどうかというのは謎だ。すでに炎は放たれている。

距離は近い。異変には気づけたものの体の反応速度は老化と共に落ちており、振り向いて魔力をためる余裕はなかった。

修羅場。

老人の足元に着弾し、火柱が上がる。灼熱の中で老人は立っていた。

「相手が小僧であればおぬし、一瞬にして死しておったぞ！」

内包系放出系複合魔術、刃壊。じんかい

光速とも言える高速の一閃を放つ。真空が生まれ、炎を振りほどく。

真空刃は止まらない。

絶命しかけていてもなお立ち続ける竜の首元をめがけて飛ぶ。

老人は精一杯の敬意を込めて。

竜の首と胴が離れるのを見守った。

竜の崩れ落ちる音を聞きながら、老人は一太刀を元のお守りの形に戻す。

「ま、確かに楽しめたの」

死骸に背を向け、護るべき都市へ足を向ける。

ひげがこげるような戦闘は、今日が初めてだ。

「心配？」

アーシュの手にしていた本物の八剣は、すでに所有者を失った武器だ。八剣に関わらず、今まで十三の武器を手にした所有者たちが気に入っていた形もまた、すでに失われている。それぞれの望む形であらねえばならないそれらは、変化し続けるものだったからだ。

すなわち八剣も、今はただの土塊になった。

それがどういう意図か、都市の中心となる城、その謁見の間に展示されている。

「……なぜ俺が？」

モトランは不機嫌そうな目つきでベラリスを見下ろした。彼らの身長差は歴然としていて、他社からはまるで親子のようにすら見えるほどだ。

「いや、それを眺めてるからさあ。心配なのかな？ って思ってた謁見の間というのはただの名目で、一般家庭的に言えば、例の守護者たちのリビングとなっている。とにかく広いというのが何よりも都合が良かったのである。

とはいえ、装飾のついたソファや質の良い赤絨毯に、ただの机などにも大量の金が使われているのが何とも城の一角らしい。

モトランに言わせれば、税金の無駄遣いだ。

そして、その税金はモトランの吸っている煙草にも大量にかかっている。使い道がわかるモトランからしてみれば、減らせと言いた

くなるほどかかっている。

「なぜ俺が」

ベラリスの話は切って捨てるに限ることを、モトランは学習していた。

窓の外へ紫煙を吹き出す。やはり飾られた窓枠に肘をつけ、壁にもたれかかるようにしてモトランは煙草をふかしていた。

ベラリスはというと、これまた高そうなソファで寝転んでいた。

彼女の背丈だからこそこできることではあり、子供が行うこととしてはモトランにもわからなくはないのだが、自分とほぼ同年代の女が、たとえ子供のような容姿をしていたとしても羞恥心なくダラダラとしているのはどうか。

王が目にしたら。それを想像するだけで充分に滑稽だった。

だが顔は笑わない。モトランはいつだってそうだ。

「だってあの子、結構頑張ってたじゃない。何だっけ？ 全員に弟子入りしたんでしょ？」

全員というのは守護者全員のことを指すのだろう。

話に聞く限りでは、アーシュは守護者全員から武器の使い方を学び、技も教えてもらっていたらしい。

「ああ。あのガキは器用だったからな。面白がっているんなことをやらしていたらしい」

当事者が一人、モトランの目の前にいるが。

モトランも確かに大砲や銃の使い方を教えはしたが、他とは違い、玩具にした覚えはない。

「飲み込みが早かったわよね。私も教え甲斐があったわよ」

うむうむとうなずきながら天井を仰ぎ見るベラリスをよそに、モトランはもう一度土塊を見た。

無残な姿。剣身の役割をしていた白い部分が溶けるような形で静止している。

視界の端で、ベラリスが起き上がってソファに腰をかけたのが見えた。

「まさか駆け落ちして出ていくなんてねー」

しかし、八剣がこうなるということは、守護者の武器は皆この形だったのだろうか。普段は考えないことを想像してみる。

「居候していた家のお嬢さまとだっけ？　なかなかやるわよねえ」

キーホルダーとなっている二丁大砲もまた、モトランが所有者でなくなれば、ああいう形になるのだろうか。とても信じられることではないが、現にアーシュによって証明されている。

信じられないといえば、モトランにとっては武器や魔力、果ては世界の成り立ちさえ世界の常識となっているものが信じられないものだった。

「ねえ、聞してる？」

「聞いている」

「じゃあ、してみる？」

「なにをだ」

「駆け落ち」

「誰がだ」

「私とあなた」

「なぜ」

と、そこまで問答が進んで、ベラリスが一つため息を吐いた。モトランは怪訝な顔をする。

「いちいち理由を求める癖、どうにかならない？」

「いちいち無駄なことを言う癖はどうにもならないのか？」

「どうにもならないわよ」

「無論、俺もだ」

モトランは低く唸りを上げた。

ベラリスが「じゃあ……」と切り出したところで、ドアが開く。

開いた人物の動作そのものはゆっくりだったが、ドアは盛大な音を立てた。

ドアに背を向ける形になっていたモトランは面倒くさそうに振り返る。

見慣れた老人がそこにいた。ただ、白く長かったひげがかなり短くなっているところが大違いだが。

「終わったか」

振り返らずにモトランは訊いた。

「む、終わったぞ。まさかお前さんたち、見ていなかったのか？」

「見るまでもないだろう」「見るまでもないでしょ」
重なる。

モトランとベラリスの頭の中に、この老人が負けるという、もつと言えば死ぬという選択肢さえ存在しない。

老人は呆れた様子ながらも「クツクツク」と笑い飛ばし、小さなソファにどっかりと腰を下ろした。

「で、どうだったの？ 楽しかった？」

「まあ。あやつのおかげで髭が焦げてしまったわ」

髭の少なくなったあごをなで、喉を鳴らす好々爺の名前はガンテ・イツラフェウス。

「クレイネルの小僧はどこじゃ？」

「出ていった」

愛想なし、遠慮なしで答えるのはもちろんモトランだ。

「まさか、駆け落ちなどとは言えないな」

「うっん。アーシュくんを見送りに。あと、クレイに性欲は絶対ないと断言できるから、アーシュくんと同じことはしないと断言わよ」

「いや、あやつらは性欲から駆け落ちしたわけではないと思うがの」とりあえず、モトランには関係のない話題だ。耳に向けていた魔力を抜き、煙草の煙を吐くことだけに集中する。

「何よ、おじいさんの癖に。色恋沙汰に口を出すもんじゃないわよ」

「何じゃ、子供の癖に。色恋沙汰に口を出すもんじゃなかるうが」

「子供じゃないわあああああ！」

心底どうでもよかった。小僧どもの色恋沙汰、爺と見た目が幼女である年増女性の戯れ、それによって起こるであろう家具破壊、怒

りに満ちたメイド長の顔。

全てがどうでもいい。

「可愛い孫娘がまさか性欲で家出したとは思えぬじやろうが！」

「可愛い愛弟子がまさか性欲以外で女一人を連れ出すとは思えないのよ！」

お前はいつたい、あのガキにどういう認識を持っていたんだ？

やはりどうでもよいことだ。

とはいえ、実際アーシュの行動原理はモトランにもわからない。魔力を持たない一般人など連れて行って何のメリットがあるのだろうか。

いや、尻に引かれたい放題のアーシュだ。駆け落ちしたと言われている相手が強引についていこうとしたのかもしれない。

「……わからん」

考えるだけ無駄。どうでもよい。それでいい。否、それがいい。

とりあえず、この場を離れておいたほうがよさそうだ。メイド長の説教は原因の二人に受けてもらうことにしよう。

そう考えたモトランは煙草を手で握りつぶしながら、颯爽と窓から飛び降りた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1417v/>

Life to Door

2011年10月10日03時16分発行